

## 編集後記

『言語文化』第四三号をお届けいたします。本号には二本の論文を掲載いたしました。一本は、富山英俊名誉教授によるホイットマン論であり、二〇二四年六月開催の日本英文学会関東支部シンポジウムでのご発表をもとに、あらためてご執筆いただいたものです。もう一本は、湯沢英彦名誉教授による論考で、二〇二五年二月に本学で行われた最終講義をもとに、モンテーニュ、ルソー、ブルーストをめぐる思索をまとめていただきました。大会での発表、そして最終講義という、それぞれに特別な場から生まれた二本の論文が、本号においてあらためて活字となり、広く読者の皆様のもとに届けられることを、たいへん嬉しく思

っております。

続いて、言語文化研究所の二〇二五年度の活動を振り返ってみたいと思います。本年度は、分野の枠を越えた四つの多彩なイベントを開催することができました。一月十九日には、エマニュエル・ロズラン氏（フランス国立東洋言語文化大学）をお招きし、「俳人〇〇七・文化の国際化をめぐって」と題する講演会をフランス文学科と共催いたしました。一月二十四日には、写真家の志賀理江子氏をお迎えし、「写真表現と、私の体」と題した講演会を開催いたしました。二月十二日には、「ヘルンさんの本棚・小泉八雲の愛した英仏文学」と題して、中島淑恵氏（富山大学教授）にご講演いただきました。さらに二月十四日には、松井健氏（金城次郎館長・東京大学名誉教授）による「沖繩の焼物（やちむ

ん）、伝統と金城次郎」と題した講演、および「今、薪窯を炊くこと」と題して、松井健氏と松田共司氏（読谷山焼北窯松田共司工房）による対談が行われました。いずれの催しにも学内外から多くの方々にご参加いただき、盛況のうちに終えることができました。

来年度につきましては、六月から翌年三月にかけて、すでに六件のイベントが企画されており、本年度にも増して活発な活動が期待されます。詳細は言語文化研究所ホームページにてご確認ください。

また、二〇二五年度の講座として、「うちなーぐち講座」「ホメーロス研究会」がオンライン形式で開催され、「古典ギリシア語初歩文法講座」は対面形式で実施されました。「古典ギリシア語初歩文法講座」は本年度をもって終了いたしますが、前二講

座は来年度もオンラインにて継続予定です。こちらの詳細につきましては、本研究所ホームページをご参照ください。

最後に、本年度をもって所長としての二年間の任期を終えることとな

りました。委員の先生方をはじめ、

主事の平岩健先生、文学部・言語文化研究所事務担当の伊東絢さんのご理解とご尽力なくして、この任を全うすることはできませんでした。ここにあらためて深く感謝申し上げます。

本研究所の活動が、今後もさまざまな言語文化の対話と探究の場として発展していくことを願い、本号の編集後記といたします。

(中西公子)

表紙画：Jean Simeón Chardin

表 『水差し、ゴブレット、レモン、リンゴ、洋梨のある静物』一七五〇年頃制作  
裏 『プリオッシュュ』一七六三年制作

所蔵：カールスルーエ州立美術館／ルーヴル美術館

出典：Wikipedia Commons